

大内兵衛博士の略歴

明治21(1888)年 8月29日	兵庫県(淡路島)生まれ
明治42(1909)年 7月	第五高等学校卒業
大正 2(1913)年 7月	東京帝国大学法科大学経済学科卒業
同月	大蔵省入省
大正 4(1915)年 2月	竹田貞松長女笹代と結婚
大正 7(1918)年 6月	二男力(つとむ) 誕生
8月	東京帝国大学農科大学講師(嘱託)
大正 8(1919)年 5月	東京帝国大学経済学部(新設)助教授。政学講座担当
大正 9(1920)年 1月	森戸助教授筆禍事件に連座、休職を命ぜられる
10月	森戸事件の刑確定、失官退職。大原社会問題研究所嘱託に就任
大正10(1921)年 2月	ヨーロッパ留学
10月	特赦
大正11(1922)年 2月	東京帝国大学助教授に復職
大正12(1923)年 10月	帰国
11月	東京帝国大学教授に就任。財政学第二講座を担当
昭和13(1938)年 12月	治安維持法違反容疑で起訴、大学を休職
昭和19(1944)年 9月	治安維持法違反容疑につき、無罪判決
10月	東京帝国大学総長より辞職勧告を受けるも、拒否。休職を命ぜられる
昭和20(1945)年 12月	東京帝国大学教授に復職、財政学第一講座を担当
昭和21(1946)年 12月	統計委員会委員長となる
昭和22(1947)年 12月	東京大学から経済学博士の学位を受ける
昭和23(1948)年 3月	日本学士院会員となる
昭和24(1949)年 3月	停年にて東京大学退官
昭和25(1950)年 2月	財団法人全国統計協会連合会会長に就任
4月	東京大学名誉教授の称号を受ける
9月	法政大学総長に就任
昭和27(1952)年 8月	統計委員会廃止に伴い、委員長を辞任
9月	統計審議会設置に伴い、会長に就任
昭和28(1953)年 3月	大内賞委員会発足に伴い、委員長に就任
昭和32(1957)年 3月	統計審議会会長を退任。これに伴い大内賞委員会委員長を退任
昭和34(1959)年 4月	法政大学総長を辞任
昭和45(1970)年 2月	財団法人全国統計協会連合会会長を辞任
昭和55(1980)年 5月 1日	享年91歳にて永眠

(財団法人全国統計協会連合会「大内兵衛と日本の統計」より)

講演録 『戦後統計事始め』

10年あまり、私は、統計委員または統計審議会委員をしていた。役所関係の委員としては、この上もなくのんきで楽しかった。いろいろのことがあるが、人の和を得ていたせいであり、関係の皆さんに対して感謝の念で一杯である。

そういうスイートな思い出のなかで、たびたびクローズ・アップされるのは、ライス（※1）さんと吉田（※2）さんである。

※1 ライス（Stuart A. Rice, 1889～1969）合衆国の社会学者、統計学者で、1930年代、合衆国予算局に統計基準局を設置し、その局長を務めた。第2次世界大戦後、占領下の日本において、統計再建のためコンサルタントとして尽力し、さらに1958年から5年間、韓国政府の統計顧問を務めた。

※2 吉田茂（明治11(1878)年～昭和42(1967)年）外交官、政治家。戦後、外相、昭和21年日本自由党総裁、次いで首相。昭和23～29年に連続して首相となり、戦後政治の基本路線を定め、親米政策を推進。昭和26年、サンフランシスコ講和条約に調印。

はじめてライスさんにお目にかかったのは、NHKの会長室であった。そのときこの会長は高野岩三郎（※3）先生であった。先生はいうまでもなく久しい間国際統計協会の日本代表委員であり、ライスさんはこの協会の会長であったが、相互に旧知というほどの仲ではなかった。ライスさんは、このとき同時にアメリカ政府予算局の統計基準部長でもあって、とくに日本に来たのは、マッカーサー元帥にたのまれて、日本の統計が戦時中あまりにもひどく破壊されていて、進駐軍の統治上に役に立たないので、それをどうして建て直すかということ进行调查するためであった。こういう目的で日本に来たライスさんが最初に連絡をとったのが高野先生であったことは、右のような高野先生とライスさんの位置から考えて極めて自然であった。しかし、私が、ライスさんにお目にかかったのは全く偶然であった。というのは、あの時、私は、他の用事で高野先生を訪ねていたときに、ライスさんがノコノコと入って来たのであるからだ。

※3 高野岩三郎（明治4(1871)年～昭和24(1949)年）統計学者。明治28(1895)年、帝国大学（現東京大学）法学部卒業後、明治32(1899)年から3年間ミュンヘン大学で社会統計学を専攻。東京帝国大学法学部教授、のち経済学部教授。法学博士。我が国における社会統計学の先駆者。昭和21年から亡くなるまでNHK会長を務める。

ライスさんは、自分が日本に来た理由をのべた。そして高野先生に援助を乞いたい、また、相談にもものってもらいたいといった。先生は、日本における戦時中の統計破壊の事実をのべ、自分は統計制度の再建に関心をもっているが、いまは地位上直接それに当ることはできない。幸にここに大内という男が来ている、この男がそれに関心をもっているから、万事はそれにお話をしたらいいだろうといわれた。それから話がはじまって、国際統計協会のこと、その日本における代表者のこと、アジア諸国

だけの統計連絡会議をもつべきか、南アメリカについても独立の統計連絡会議をもつべきかなどについて高野先生とライスさんの間に意見が交された。

これがライスさんと私との最初の会見であり、話合であった。このときのライスさんの印象は白髪童顔、大学者というのであった。それまでに私は進駐軍の経済顧問という学者数氏と会った経験があったが、その誰もが何かいかめしく何か検事的であって、私はいつも敗戦国の学者の悲哀を感じていたのであるが、ライスさんについてはそういう感じが全くなく、いかにも同志という感じであった。

それより前かあとか、そういうデートについて今は記憶が全くないが、私は、NHKの会長室で今一人思いがけない人に会った。それは、新たに総理大臣となった吉田さんであった。それより数日前、私は突然未知の人吉田さんの訪問を受けたことがあった。吉田さんを同道したのは私の旧友田中耕太郎君と、これは未知の武見太郎さんであった。田中君はそのとき吉田内閣の文部大臣となることが定まっていたのである。吉田さんは直ちに来意をのべたが、それは私に経済省の大臣になれ、ポストは大蔵でも通産でもいいというのであった。これは私にとってあまりにも突然な話であり、何の心用意もないから、それを断ったが、吉田さんも田中君もそういう理由ではなかなか承知せず、夜中をすぎても両君は退却しなかった。しかし私もそれにはまげず頑強に断りつづけた。しまいにはいささかまずい思いをして別れた。それから数日後その吉田さんに、ところもあろうに、私の先生の室でお会いしようとは、私はむろん当夜の無礼を謝したが、吉田さんはあっさりしたもので、そのことにはこだわらず、今日、ここに高野先生を訪ねて来た理由をのべた。これは高橋正雄君に安本長官（※4）を引うけてもらいたいのであるが、それには君を動かさねばならぬが、そのために先ず高野先生に頼んでいるのだといった。それにこたえて、それは駄目だ、そのことについては私はすでに高橋君と話をしたが、彼にはその意が全くないのだといった。これには吉田さんは、また大いに失望したが、彼はそのことはほぼあきらめて、さらに別のことを話し出した。それは、日本の統計が戦争のために全く破壊されているため、進駐軍に出すべき資料を整えることができないのでこまっている、進駐軍も一日も早く統計を整理しろというのだが、それをどういう順序でどうしてやったらいいか指図とそれについて高野先生からの指導を仰ぎたいというのであった。高野先生の答は、このときもライス博士に対すると同一であった。すなわち、それは是非やらねばならぬことであり大いにやらねばならぬことであるが、自分はNHKのことに忙しくてそれをやる時間がない、その代りにここにいる大内に頼みたまえ、彼にはまたその心用意があるだろうということであった。この答に対して、吉田さんは欣然とした。そして「そうか、大内さん、これならばやってくれるでしょうね」ということであっ

た。私も、また何のこだわることもなく「やれるだけやってみましょう」と答えた。この話は、全部で1時間もかからなかったが、戦後における日本の統計制度組織の全権を吉田首相が私に委せるという話はここで決まったのである。

※4 安本長官

戦後の昭和21年に設置された経済安定本部は「安本(あんぼん)」と略称され、その総務長官が「安本長官」と呼称された。経済安定本部は昭和27年に廃止され、その後、経済審議庁、経済企画庁と変遷し、平成13年に内閣府に継承された。

私が、吉田首相に対し、こういう重大任務を引受ける決心を、こう即座にしたのには、なおそれ以前の話がある。というのは、かねて私はそういうことの必要を感じており、また、それについての用意を少しずつしていたという話である。その話をくわしくすると長くなるが、かんたんにいえばこういうことである。私は戦時中から、もし戦後何かの仕事ができるような機会があったなら、日本の統計をよくする仕事に従事したいものだと考えていた。それは、戦時中高野先生が、政府のやり方がすべて数字を秘密にするばかりではなく、すべての数字を勝手に作り直すことによって統計を破壊し、明治以来折角骨折って出来上って来た統計の信頼性を一時にこわすことに対して憤慨され、日本統計学会をリードして政府に抗議をのべられたことがあり、その抗議文を私に起案させたことがあった。私もその主旨に心から賛成であった。そして戦時中はとても及ばないが、戦後にはその点で何かして見たいものと考えようになっていたのだ。別に終戦前から、私、渋沢日銀総裁にたのまれて、日銀で、戦後の日本はどうなるかという問題について多少の調査をしていた。そしてその目的のために渋沢さんは日銀内に「国民資力」研究所というものを作り、私をその所長として、何かそういうことをさせようとしていた。それがものにならぬうちに、終戦になったので、渋沢さんはこの調査機関に日本の将来の経済政策についての資料を作ることを、とくに統計資料を作ることを命じた。

尤も、渋沢さんがそういう注文をしたところで、そういうことはそうかんたんにできるものでなく、それには先ず統計が必要だということになって、私は同志を語らって、何よりもまず、日本統計制度を再建する方法を考えようということにした。渋沢さんは間もなく日銀をやめたので国民資力研究所も、日銀とはなれた独立の日本統計研究所(注)に改組されようとするときであった。まさにそういうときに、高野先生を仲介にして吉田さんの話がありライスさんの話があったわけである。私がこの話にのったのはそういう心用意があったからである。

こうして、戦後日本統計の再建が、日本政府とマッカーサー司令部と私ども統計学者グループの間にはじまった。もちろんこの再建の具体的な方法については、幣原内

閣の官房長官（書記官長といったが）次田太三郎氏、吉田内閣の官房長官周東英雄氏などが直接にわれわれとの折衝に当たられたが、両氏ともにわれわれの注文をよく聞いてくれた。また一方、有澤廣巳（※5）、近藤康男（※6）、高橋正雄、森田優三（※7）、館稔（※8）等の統計学者グループの諸君はいずれも日本統計制度の再建についての志を一にしてくれた。まず統計委員会ができ、それが新しい日本の統計制度を審議立案し、ついで、その委員会がその実行の機関ともなった。この統計委員には、右の学者グループの外に橋井、森、川島などの行政官諸君が加わり、後には各省の統計局部長も加わった。そしてこの委員会の局長にはいち早く美濃部亮吉君が選ばれた。

- ※5 有澤廣巳（明治29(1896)年～昭和63(1988)年）経済学者、統計学者。東京大学教授。戦後復興期の傾斜生産方式を提唱するなど、経済政策、産業政策に主導的役割を果たす。
- ※6 近藤康男（明治32(1899)年～平成17(2005)年）農業経済学者、東京大学名誉教授。一時は農林省統計調査局長を兼任し、後には武蔵大学教授などを歴任した。
- ※7 森田優三（明治34(1901)年～平成6(1994)年）統計学者。横浜高商教授を経て、昭和32年一橋大教授となる。49年亜細亜大学長。その間、内閣統計局長を兼務し、統計審議会会長を務めた。我が国における統計理論、経済統計学、人口統計学などの基礎を築いた。
- ※8 館稔（明治39(1906)年～昭和47(1972)年）昭和14年厚生省の付属機関として設立された人口問題研究所に入所、34年所長に就任。人口分析方法に独自の体系を樹立した。その傍ら国連人口委員会委員日本政府代表を12年間務め、また国際人口学会、国際統計協会などの役員を歴任。

センサスがはじまったり、抽出統計の理論が紹介されたり、統計法が出来たり、日本が国際統計協会への再加入を許されたり、統計についての国連との関係が出来たりしたのはこれから後のことであった。

以上の戦後統計の事始めは終戦の次の年、すなわち昭和21年の春から夏へかけてのことであった。あれからすでに満10年、統計の世界も多忙であったけれども、その再建は他の行政部門に比してもスピーディであったし、その結果も立派であった。こういっては、その当局者の一人であった私の自画自賛であって、識者の笑を買おうであろうことは、私にも想像がつくが、それを覚悟して、こういう自慢をして見たいのが、統計審議会会長をやめた私の本心である。

統計制度の発達についての今回の話はこれでおしまいにしたいが、この発達についてわれわれ学者グループのいうことを無条件に聞き入れてくれた吉田首相と、また日本ことに日本人の発意と工夫とに信頼すべきであり、進駐軍は干渉すべきではなく、ただその実現に外部から好意的な援助をするだけでたくさんだと考えてくれたライス博士とには、この二人の明快なる判断と処置とには、この機において、特別の感謝をささげたいと思う。と同時に、戦時中ならびに戦後、日本統計改善の必要を唱え、われわれ統計マンの発奮を促してくれた高野岩三郎先生、渋沢敬三元日銀総裁（この人はいろいろの資格をもっているが、ここではこの資格でよぶのが適当である）の遠いところを見透しての達見にも特別の敬意をささげておきたい。この四人のそれぞれの

声援と教示と信頼とがなかったら、われわれの統計再建事業は、こんなにうまくは行かなかったにちがいない。

(全国統計協会連合会「統計情報」1957年8月所収)

(注) 日本統計研究所

第二次世界大戦中の1943年に、日本銀行内に「国家資力研究所」が設立された。ここでは、1941年に大蔵省内に設立された国家資力研究室での研究を受け継ぎ、当初、国家資力、重要経済指標、所得分布、物価等を取りあげようとした。その実際的成果はケインズ理論の紹介・検討などマクロ経済理論に置かれ、研究所の「研究第〇号」および「資料甲〇号」として発行された。第二次世界大戦での敗戦に際して、日本銀行総裁であった渋沢敬三は、日本の統計が壊滅状態であることから、専門の統計研究機関を設立する必要を覚え、これに賛同する大内兵衛他の参加を得て、国家資力研究所を日銀から分離して独立の財団法人「日本統計研究所」に改組した。

日本統計研究所の改組・設立の許可は、1946年6月27日である。その創立総会(同年4月12日)でとりあげられた設立趣意書(日本統計研究所「財団法人日本統計研究所設立ノ趣旨」1946年)は、官民での統計調査の総合的再検討、新たな調査の企画・実施、官民・中央と地方の統計実務者の待遇、統計への知識の改善、国民の統計への関心と知識の増大等の必要をあげた。このために各方面の緊密な協調が必要な中で、我々もまた若干の寄与をしたいと述べている。そして、「研究所は、統計理論及び技術の研究を行い、日本及び各国の統計を比較検討すると共に、我が邦の官庁及び民間の諸機関と連絡しつつ、日本における統計事情の改善発達を促進することを期するものである」という。総会で決定した出発時の役員には、所長理事:大内兵衛、専務理事:高橋正雄、常務理事:大沢三千三、西沢基一、理事:有沢広巳、中山伊知郎、森田優三、近藤康男、監事:美濃部亮吉、脇村義太郎、研究員には吉田義三、副島種典、小林久好、大島清、西田勲、山本正治、岡田実、松川七郎、藤田武夫他の名前がある。

(法政大学日本統計研究所HPより)

随想『統計学の始まり』

皆さんはパチンコをやったことがありますか、私はやったことがない。そのわけはこうです。私のような初めての人が、同じパチンコ台で一度やってみて大いに当たったとしても、つい誘われて二度三度やっても決して当たらない。そこで更に 30 度も 50 度もやるとすると、その結果は、例えば、400 円の球を買っても、ピース 10 個は貰えない。せいぜいピース三つか二つかしか貰えないことになるに違いない。尤も私でも大いに資本をかけて一つ月も二つ月も練習をして上手になれば、少しは儲かるようになるかも知れぬが、それでも資本の計算をすれば大抵儲からないことになるでしょう。もし、これが間違っただけで全ての人がパチンコで儲けるものであるとしたら、東京中のパチンコ屋は一日で破産してしまうでしょう。これは、パチンコの統計をとってみればすぐ分かることであります。私は、統計学者であると共にケチンボでありますから、誰か、この原理と反対のことを教えてくれるまでは、パチンコはやらないつもりです。

話は、今から 350 年ほど前に遡ります。所はテムズ河のほとり、ロンドンです。当時のロンドンは今のロンドンの 10 分の 1 ほどの大きさでありましたが、そのロンドンでペストという恐ろしい病気が流行りました。そして、1603 年には 3 万、1625 年には 3 万 5 千、1638 年には 8 か月に 1 万人がこの疫病に倒れました。そのため、市内には葬式が間に合わず裸のまま担いで行く棺桶、幾つもの屍体を満載した大八車が絡繹として続けました。また、テムズ河にはこのペストを恐れて田舎へ逃げ出す市民の屋形船が一杯溢れるほどでありました。

こういうことがあったのでロンドンの市役所では、市内の教会から毎週の死体埋葬の数と洗礼を受けた子供の出生の数とを報告させました。そして、その死亡表の方には死亡の原因たる病気の名を書かせました。出生表の方には男の子か女の子かを書かせました。そして、市役所はこれらの表の数字を合計して毎週 1 枚の紙に木版で印刷しました。この紙は、ビル・オブ・モータリティ（死亡表）と言われました。そして、この死亡表を 1 枚何銭かで売りました。市民は、この死亡表が出ると、これを買いました。それはペストの勢を知るためでした。そして、この紙を種にして、これでは早く疎開しなくてはいかんと言ったり、これでは、早く黒い服地を買い溜めしておかぬと喪服に困ると言ったりした。中には、この当時王様が変わったので、ペストは新しい王様が持ってきたのだというような不埒なことを言い触らす者もありました。このときロンドンの銀座の裏町というような所に、相当裕福な七つ星の商標を掲げた毛織商があった。その店の裏の事務室とも書斎ともつかぬ部屋で、主人公のジマン・グラントという人

が、毎週市が出すビル・オブ・モータリティ（死亡表）数十年間分、集めて、丹念に研究していた。あるいはこれを市内の教会別に分けてみたり、又はそれを年度別・月別にしてみたり、あるいは10年毎に組み合せたり、特にペストの流行った年については死因別と週別とを組合せたりしていた。グラントは若いときから頭のいい人という評判の人であったが、それにしても、毎日、商売人が商売のことを忘れて、ソロバンばかり置いているのを見て、近所の人々は、グラントさんは近ごろ少しおかしいね、気が狂ったんじゃないかなど言いました。しかし、彼は無論気が狂ったのではなく、この何千枚もある死亡表に並んでいる数字は、色々に計算をしてみると、このロンドンという町がどんなに苦しんでいるか、どんなに生長するか、どんな理由で変化するかを示しました。即ち、数字はグラントの計算を通じて今まで人の知らない真実を語ったのでした。彼がにこにこしているのは、それが嬉しくて堪らなかったからです。かくして10年、彼は1662年に至って、一つの書物として彼の研究の結果を公にした、これが、「死亡表に関する自然的政治的観察」という本であります。これが世界における統計学の最初の本であり、今日でも全ての統計学の本のうちで一番独創に富んだ本とされています。昭和6年、日本でもこの本は大原社会問題研究所が編纂した統計学古典選集の第3巻として久留間鮫造君の翻訳によって出ております。この書物によって、人間は色々の病気で死ぬけれども、胃病で死ぬ者はそのうちで何人、肺病は何人、神経病は何人というこの割合が大体決まっている、ということが分かるのであります。人間は生まれるときには女の子よりも男の子の方が多いということ、しかし、一生を通じて見れば男と女との数は大体同数であることが分かるのであります。これは、男は子供の時に女よりも余計死ぬからであります。また、この本によると、ロンドンのような都会の人は田舎の人よりも死ぬ率が多いこと、そういうことが初めて分かったのであります。

今日からいえば、こんなことは誰でも知っているが、しかし、1枚の紙に書かれた沢山の数字のうちから、初めてこの原理を発見したのは天才の仕事でありました。その後300年を真中においてセンサス国勢調査というものが行われ、今ではこういう原理はもっともっと正確にもっと詳しく知れわたっています。その上、統計は生物学にも医学にも商品の製造にも、商品の販売にも、また世論の調査にも応用されて、一切の政治、一切の政策の基礎になりました。

昔、コロンブスがアメリカを発見して帰って来たとき、スペインの王様が彼のために盛大な歓迎会を開きました。そのとき、この宴席であるお客さまがコロンブスでなくても、誰でもアメリカは発見できると申しました。コロンブスは、直ちに立ち上って、それもそうだが、それでは皆さんの前にある卵をこの机の上に立ててごらんない、と言

いました。皆はそれぞれやってみましたが、一向に立ちません。このとき、コロンブスは自分の卵を手に取り皆にこれを見せ、種も仕掛けありませんと言って、ビシヤリと卵が少し割れるようにして机の上に置きました。卵はピタリと立ちました。この話は無論作り話ではありますが、それにしても何事でも今まで人のやらぬことを初めて成功するのは難しい。

統計学の最初の書物たる右のグラントの本の当時の大臣ロバーツ卿に捧げた序文には、次の如く書いてあります。

「さて私は、死亡表に想いをいたしました。莫大な錯綜した資料を要約して、そこから若干の簡潔な結果を得ました……それは私にとりましては（かく申すのは自惚れかも知れませんが……）恰も美しいダイヤモンドのように見えます。これは私には無用のものであり、まさか、あなた（ロバーツ卿という大臣）のような地位にいられる方々には大いに役に立つかと存じます」と。まことに統計は、知識のダイヤモンドです。これをうまく利用しますと、政治も良くなり製品の品質も良くなり、販売の手数も省け、その他一切の学問が進歩いたします。

親愛なる皆さま、パチンコはやってもやらなくてもよろしいが、統計は大切にしてください。

（財団法人全国統計協会連合会「統計通信」1952年7月号所収）